第３回宮城県美術館リニューアル基本構想策定に係る懇話会　会議録

○　日　時　　平成２７年１０月１６日（金）　午後２時～午後４時
○　場　所　　宮城県美術館　佐藤忠良記念館会議室
○　出席者
（委　員）佐々木吉晴座長　　泉　武夫委員　　小野田泰明委員
高山　登委員　　竹内美恵子委員　　吉川　由美委員
（欠席委員　２名）　大場　尚文委員　　中村　政人委員
（宮城県教育委員会・宮城県美術館）
三浦正之教育庁参事兼生涯学習課長　鹿野田副参事兼課長補佐　大森管理調整班長　小野寺社会教育支援班長　　上原社会教育支援班課長補佐
有川幾夫館長　　米倉　誠副館長　　三上満良副館長
川村広明管理部次長（総括担当）　　和田浩一学芸部長
西塚　弘教育普及部長　　高橋伸昭総務管理班主幹　松崎なつひ学芸員

１　開　　会

（進行：上原課長補佐）

只今から第３回「宮城県美術館リニューアル基本構想策定に係る懇話会」を開会いたします。

なお，情報公開条例 19 条によりまして，県の付属機関の会議につきましては，原則公開となっております。本懇話会につきましては，公開により審議を進めさせていただきます。

本日，大場委員及び中村委員から欠席の連絡が入っております。

それでは，さっそく議事に入ります。以後の進行につきましては，座長にお願いいたします。

２　会議録署名委員の指名

（佐々木座長）

みなさんこんにちは。本日の会議の議事録署名委員２名を指名させていただきます。名簿順に小野田委員と吉川委員にお願いいたします。

議事に入ります前に，傍聴人の取り扱いについて御説明申し上げます。本会議の傍聴につきましては「審議会等の公開に関する事務取扱要綱」が定められておりますが，本日の傍聴希望者について報告願います。

（事務局：小野寺）

本日，傍聴を希望している方はおりません。

（佐々木座長）

わかりました。

なお，「審議会等の会議の公開に関する事務取扱要綱」第８条により，公開した会議の資料及び発言者を明記した会議録については，県政情報センターにおいて３年間県民の方々の閲覧に供することになっておりますので御了解願います。

それでは，議事に入ります。

３　議　事

（佐々木座長）

はじめに（１）報告です。第２回懇話会について事務局から報告をお願いします。

（事務局：小野寺）

説明に入る前に資料の訂正をさせていただきます。資料は事前に送付しておりましたが，資料３につきまして，事業の目的の項目を加えましたので，宜しくお願いいたします。

資料１・２について説明。

・資料１は第２回懇話会の意見と内容をまとめたもの。詳しい内容については，協議の場面で意見をいただく。

・今後の進め方について多くの意見を頂戴したので，その点について資料２で確認。

（佐々木座長）

この件について，何か質問はございますか。

（高山委員）

今後の年度については，平成３０年からどれくらい先のことなのだろうか。

（事務局：小野寺）

現時点では，はっきりとは申し上げられませんが，平成２９年度に美術館リニューアル基本計画を策定する予定です。結構長期スパンになる見込みです。

（高山委員）

長期というのはどのくらいなのか。

（事務局：小野寺）

だいたい５年くらいのスパンと考えています。あくまでも想定ですので，実際の予算や財政課とのやりとりで動く可能性があります。

（高山委員）

長期になると言うことは，相当の予算をつける覚悟があるということでしょうか。

（事務局）

今回の意見をもとにした基本構想によって，基本計画を策定するので，それに沿って具体の予算等は決まってくるという想定です。

（佐々木座長）
他に質問はありませんか。これを踏まえて，何か御意見があればお願いします。

（意見無し）

（佐々木座長）
それでは，（２）の協議に入ります。初めにイ「第２回懇話会議論の整理について」説明をお願いします。

（高山委員）
協議に入る前に，この懇話会にあるような基本構想について，この美術館が開館してから，以前にはこういう会議等はなかったのですか。

（事務局）
新しく増築するなどの議論はありましたが，リニューアルについては今回が初めてですので，丁寧に議論させていただきます。

（高山委員）
その辺りの事に関して，それなりの資料はありますか。これまで美術館について，忠良記念館が出来たり，他にも何かつくるなどのうわさがありましたが，それらについて整理したものはありますか。

（事務局）
特にありません。

（高山委員）
そういうものは無いとして考えていいのですか。

（事務局）
そうです。今回改めて一からリニューアルに関して議論していただくと言うことになります。

（高山委員）
これまでの経過の中でどういう問題があったのか。本来できあがって終わりと言う事では無く，その後に美術館としてどうしたいという思いがあったと思いますが，途中でそれが断ち切れたのか，何とか継続していこうということが県の中にあったのか，それらが出来なかった理由やそのときの問題点は何なのかなど。そういうデータがあれば我々としても見てみたいと思います。

（事務局）
過去の資料について，もう一度整理して，関連することがあれば，次回の懇話会で提示いたします。

（吉川委員）
このスケジュールに関してですが，もしリニューアルできたとして，２０２３年頃になるわけですね。ここから８年の月日をかけるとすると。

（事務局）
理想的にいけばですが，はっきりとした数字を示すことは難しいです。

（吉川委員）
少なくとも，３年後というようになるわけではないですよね。すると２０２３年で考えた場合，今から５～６年先にはどんな時代になるか誰も分からない状態で，今構想していることが，そのときには，もう違うニーズや違う状況になっている可能性があるわけです。この３年間で議論したことがまた無に臥す可能性もあるわけです。しかもかなり世代の高い年齢層で話し合っているわけです。
だから常にここの議論が県民の皆さんにより開かれていて，これから使っていく（維持していく）若い世代にも，この我々の議論に入ってもらいながら，みんなで美術館を維持していかなくてはならないのはなぜなのか，どんな活用をしていくと納税者として満足なのかという議論に関われる工夫が必要だと思います。
また閉ざされた会議（業界の人だけが集まった）では，２０２３年以降にみんなに愛される美術館にはならないと思います。ほとんどの県民の方には生活の中に美術館は無いわけです。美術の好きな人で美術館のことを考えている人はいるかもしれませんが，こういう私でさえ，頻繁に美術館に来ているわけではありません。だから，ぜひスケジュールの中に県民の目線で，美術館を自分のこととして考える機会をプロセスの中に入れ込むようにしてほしいです。そうしないと危険な部分があると思いますし，私たちも意見を言っても責任が持てないわけです。
２０２５年問題と騒がれていることもあるし，宮城県としても加速度的に２０２５年問題に進んでいく可能性があります。そういうことも踏まえながら考えていかないと予算も付かなくなると思います。

（佐々木座長）
手順はともかく，大変貴重な御意見だと思います。確か前回小野田委員からも出されたことでした。幅広い世代から人を呼んで幅広く話を聴くということだったと思いますが。

（小野田委員）
まったく同感です。若い世代の人はなぜ美術館が必要か考えることは少ないですし，ほとんどが美術館に行ったことがありません。なぜ必要かについても理解していません。

我々はカリキュラムの中に図画工作が位置づけられていて，豊かに教育して頂いた世代ですが，今はコマ数も減らされ，専科の先生も地域によってはあまりいません。ほとんど美術館に行ったことが無かったり，興味も無いような人たちに，なぜ美術館が必要なのかとか，美術館があると人生が豊かになるよ，なぜ変えなくてはいけないのかということを考えるプロセスを入れていかないといけないと思います。

東京ではそういうことを仕掛けながら成功している例はありますが，それは特殊な事例でやっているのであって，ここの条件でやっていくことがどういうことかというのは誰も分からないことだと思います。

しかも，この箱（躯体）を守りながらというのですから，なおさらです。

（高山委員）

今は美術教育活動として美術館がどう位置づけられているのかということが見えません。実際によく大学生を岩手県や福島県，宮城県の美術館や博物館を連れ歩きますが，ほとんど小中学校の頃に来たことが無い子が多いです。また，修学旅行の歩き方と同じで，ぞろぞろと歩いて出て行ってしまいます。よく観るということもない。いわゆる文化として美術館を見つめることができていません。彼らに文化が滅びることは国も滅ぶことだという危機感はないし，宮城県の大人にもそういう意識は無いし，たぶん宮城県の職員にも無いと思います。その辺を固めるために，実際にいろいろな世代の人に話を聞いていくことが大切です。

そのときに，今の美術教育は何をやっているのかと考えてみると，鑑賞教育などは内容がひどいものになっています。中学校の先生は何をやっているのかと思います。まず教える教師に，鑑賞教育をやる教養が無く，本物を見たことも無い。先生達も美術館にも行かないし，体験も無いから現場でものを作ったことも無い先生も多い。それは美術室が無いということもあるかもしれないが，学校で卒業生が絵を描いていると遊んでいるんじゃないと怒られることもあるらしい。

そういう学校教育の現状の中で，美術館だけがああでもない，こうでもないと言っていても始まらないことですが，もっと大きなフィールドでつかまえて，総合的に考えていかないと美術館が何をやっていくべきなのかとか将来的にどうしていくのかということを，我々のような美術の専門家や建築の専門家が考えていくのはともかくとして，一般の人にとってはもっと遠い存在になっています。その辺の意見を聞き出さないといけない。

最近話題になっていることとして「遊園地化」していくことが美術館を救う道というような考え方です。それでいいのかという根本的な議論がない中で，もっとゆっくり時間をかけて，芸術と文化に触れられ，実際に人間性が豊かになるイメージが湧かないと，基本的な科学と文化の２本立てによる大きな教育体系は出てきません。そこをきちんと踏まえていかないと，どうしても見えてくるのは，壁を白くするなどに目が行ってしまいがちになります。もっと重要なことがあると思う。

（佐々木座長）

ありがとうございました。リニューアルスケジュールのことが先行していますが，これはこ

れで大変貴重な意見だと思います。ぜひとも若い人たちも含めて多様な意見を集約できるようなシステムをこの後考えてもらえればと思います。僕らが足りないというのでは無くて，年代的に幅広い層からいろんな意見をもらう機会が大事になってくる。そうした活動を通してそれが宣伝にもなっていくし，美術館の理解を深める機会にもなる。ぜひこの後の計画の中で考えてもらいたい。

それから高山委員の御意見の後半は教育普及のことについてでした。今日の本題に関わる事なので，後ほど意見をもらえるようにしたいと思います。

改めて第２回の議論の整理についてもう一度説明をお願いします。

（事務局：小野寺）

ただ今いただいた意見は事務局で承り，検討したいと思います。

資料１を使って説明。

（佐々木座長）

ただ今の説明に何か御質問はございますか。

（質問無し）

では，発言の訂正や内容についての御意見を頂きたいと思いますが，細かい文言等につきましては，今後文言をまとめる作業のときにより適切な言葉にして落とし込むということにしたいと思います。大きな枠組みとして，この意見が適切かどうかについてお考えをお聞かせください。

（泉委員）

前回欠席いたしましたので，この要約が妥当かどうかの判断は難しいですが，これを読んでみて足りない視点があるように思います。それは外側からの見た視点ではなく内側からの視点があると思います。つまりここで活動する学芸員の活動を支援するという側面，学芸員が活動しやすくなるための項目も必要と思います。

後から出てくる教育普及活動の内容が，活動面の議論の中心となりますが，その議論は大切なこととして。この宮城県美術館の活動は全国的に見てもかなり良いことをやっていると思いますが，足りないのは研究面だと思います。研究というのは展示に反映されるもので，直接目に見えるものではありませんが，展示の質を高めるとか企画力をつけるという点ではどうしても欠かせないところです。実際には忙しいのでそんなことをやっている時間は無いということがどこの公立美術館でも言えることだと思います。

例えば研究紀要を発行している美術館がどれだけあるかと言えば，これは微々たるものでしかありません。それを強要は出来ませんが，そういう所に現れているように研究面でのサポートができることがリニューアルの項目に入って欲しいと思います。

具体的にどうするかはそう簡単には分かりませんが，リニューアルすると展示面積が増えて，

事務部門，学芸部門のスペースが小さくなるというのがおおかたの傾向でありまして，活動環境が狭くなり，それだけでも余計なプレッシャーがかかり，もっとのびのびとやれるはずのところが食い込まれてしまうということが危惧されます。

一例ですが，私は博物館勤務が長いので，単純に比べてどうとは言えない部分がありますが，以前勤めていた京都国立博物館ではスクラップ＆ビィルド方式で進めてきました。全面的な作り替えでしたが，私はその初期の６，７年関わりました。最初に学芸員が自分の活動の基本を把握して，自己評価して，継続すべきかどうかを洗い出して，次の段階で，理想的な博物館の建物のプランについて打ち出していったわけです。建物プランは完全におしゃかになりました。それは明らかに素人が考えたものだったので，予算オーバーしました。次にリアルな設計プランに移りましたが，それは通りまして，それをもとに設計に移りました。

そのときの分かれ目は，延べ面積では無く，建物の敷地面積の１㎡当たりにかける予算が９０万円以内という指針でした。それは東京国立博物館の平成館を建てたときの単価でした。単純に敷地面積×９０万円という，その範囲内でやることとなって，その範囲で自主設計し，コンペをして設計図を作り，そのあと学芸員と調整の話し合いをして，建築側と学芸側がマインド会議をして，ようやく一昨年できました。その間１７年間ぐらいかかりました。それはスクラップ＆ビィルドのやり方でした。

今回は限定的なリニューアルなので，もっと短期間で済むと思いますが，結局根幹になったのは館の中の学芸活動のポリシーとその自己評価でした。それが最後までずっと変わりませんでした。結局，展示面積は同じか狭まりました。事務部門，学芸部門は少し狭くなって使いづらくなったところもありました。圧倒的に増えたのが共用部分でした。ロビーや一般の人が出入りするところです。そういう例がありましたので，御紹介しました。

（佐々木座長）

ありがとうございました。今まで建物を中心にハードやソフトについて協議し，御意見を伺ってきました。内側からの視点，学芸サイドが積み重ねてきた考え方はどうなのかについては確かに少し欠けていたように思います。この辺については，有川館長のお考えはどうでしょうか。

（美術館：有川館長）

あまり意見を申し上げる立場では無いのですが，調査研究活動が美術館を維持するための必要な要素であることは分かりますが，そのことにかける労力はなかなか難しい。それをリニューアルにあたってハードウエア面にどう結びつかるかということもあるかと思います。

（佐々木座長）

博物館学では５つの機能に分けている。収集，保存，展示，教育普及，そして最後に調査研究です。この５つがからみ合いながら健全な美術館（博物館）を創り上げるという考え方が国際的には定義づけられていますが，どちらかというと，日本では調査研究に十分な時間がとれないことが実情であると思います。それが十分にとれないと，十分な活動につながらないとい

うことになりますので，これにつきましては，どこかで対比させるなど，やり方はまかせるので，そういう意見もうまく採り上げられるように考えていただきたい。

（高山委員）
宮城県美術館の学芸員室は，普通のオフィスディスクになっているので，ブース型ではありません。そこできちんと研究できるのかなとは思います。他の美術館では，ブース型で良くやっているようだが，本が置けて，資料などもきちんとおけるようになっている。
学芸員の問題だけでは無く，外国の美術館に行って，私がこの作家のある時代のものを研究したいと言うと，部屋を与えられて，絵が並んでいて，その作家に関するものが準備されていて，一人助手が付いて，文献があって，一日使って良いという形があって，全体的にもそうなっています。そういうのは日本では見たことがありません。基本的に日本の美術館は外国とは異なっていると感じます。将来的に考えていくとすれば，それを超えるくらいでないといけないし，今をちょっと良くする程度では間に合いません。日本は日本流の貧しい感覚に慣れてしまっているのが現状ではないでしょうか。なんでこんなに貧しいのだろうかと思います。心も貧しくなっているよね。

（吉川委員）
一般の人は学芸員が何をする人なのか意識していません。美術館は絵を展示するところという意識です。その理解が深まらない限り，リニューアルにお金をみんなで付けなくてはいけないんだという気運は盛り上がらないと思います。本当にできるかどうかの大きな動かす力になるところだから，そこが大きな問題ですよね。

（高山委員）
展示されているだけではなくて，資料や文献もたくさんあるはず。今のところ，日本の公的な施設で，自由に公開されていたり，研究できる体制が整っている美術館はあるのだろうか。

（泉委員）
博物館はありますけども。

（高山委員）
博物館には資料館がきちんとついているのでいいけれども，日本は美術館と博物館と分けて考えるところがあります。ミュージアムで動物園も植物園もみんな一緒に考えてほしいけれども，それができていない。

（佐々木座長）
せっかく多くの方々から，学芸員の質を高めて欲しいという意見も出ておりますので，それについては，県と美術館でよく協議しながら検討していけるようにしていくと良いのではないでしょうか。

（泉委員）
誤解のないように，私が申し上げたのは，質を高めるのでは無く，活動をしやすくするということです。

（佐々木座長）
失礼しました。学芸員の活動の質を高めるということですね。

（吉川委員）
ちなみに宮城県美術館の学芸員は，ここでどういう研究をしたいというか，ここの美術館としてするべき研究は何だと思っているのですか。

（高山委員）
ところで，今，研究紀要は毎年出ているのですか。

（美術館：有川館長）
現在は出ていません。途絶しています。まずは企画展のカタログの原稿作成や解説に力を入れています。

（高山委員）
学芸員の人数が少なすぎるように思います。文化的に豊かにしていくにはもっと多くの人がいて，そのための施設設備を確保して，学芸員がもっと関われるようにしないといけない。片方でビデオを回して，片方で別なことをしているのでは大変で，とても研究している余裕はありません。宮城県は全国的には一番予算が少ないので，もっとしっかりとしてもらわないと，文化を発信しないところで文化は発展しないということが分かっていないのではないでしょうか。

（佐々木座長）
学芸員の絶対数については全国的な問題ではありますが，リニューアルをいち早くやる美術館だからこそ，そういう点もしっかりと意識を持って取り組んで欲しいですね。
その他にありますか。特になければ，このあとの話し合いで随時出していただきたいと思います。
続いて協議の（ロ）教育普及活動に入ります。教育普及活動について説明をお願いします。

（美術館：西塚教育普及部長）
資料３を使って説明。

（佐々木座長）

只今の説明に何か御質問はございませんか。

（高山委員）
宮城県美術館は，全国の中でも，創作室の活動は割と充実している方だと思います。子どもや幼児の対象が増えているようですが，外国の美術館では，「チルドレンミュージアム」はどこでもあるようになっています。ここでやらなくてはならない状況であれば，「チルドレンミュージアム」的な受け皿を考えていかなくてはならないと思います。
ただ，こういう活動状況の広報についてちらしだけでやっているようですが，解説や写真など様子が分かるものがどこにも無くて，よく分からない。三重県美術館などは，コレクションの写真や解説等で，美術館が動いている様子が見て取れるようになっていますが，ここはいわゆるちらしだけでやっているので，美術館の生きている形が見えてこない。もっと見えるような広報活動が重要ではないかと思います。特に創作活動では，その広報活動が無いと人は動きません。

（佐々木座長）
今の高山委員の質問の広報活動をどのようにやっているのかお聞きしたいのですが。

（西塚部長）
一番大きいのはＨＰへの掲載となりますが，教育普及部のそれぞれのワークショップ活動については紙媒体のパンフレットの配布や，創作室前にパンフレットを置いておくということが中心です。

（高山委員）
お知らせ程度で中身が見えないので，中身が見せられるようにしていかないといけない。

（佐々木座長）
大事なポイントですね。いわき市美術館でも，意図的にテレビ局とかに働きかけをしています。アウトリーチのワークショップの内容を流すようにした結果，市内各地から依頼が来るようになりました。

（高山委員）
本来であれば，そういう所に県の広報が積極的に関わらなくてはならないのに，県の広報は何をやっているのかということになります。

（吉川委員）
今のに関連して，学芸員と教育普及部員と広報担当などの職員はばらばらの別な人がやっいるのですか。

（西塚部長）
　ばらばらというか，教員関係が２名、教育普及専門の学芸員が３名，その他非常勤の職員がポスターなどを作製しています。完全独立ではありませんが，それぞれオーバーラップするところはあるので，それぞれ仕事をしている形です。

（吉川委員）
　では，学芸員は，学芸員の仕事と教育普及の仕事を両方やっていると言うことですか。

（松崎・西塚）
　基本的には，別々に仕事をしています。教育普及は教育普及担当の学芸員が行っています。

（吉川委員）
　多くの館では，よく学芸員が教育普及も仕事にしているところがありますが，結構大変なところが多いです。

（西塚部長）
　それとは別です。

（吉川委員）
　教育普及活動を専門にする人がいると言うことですね。それはすごいですね。

（佐々木座長）
　ちなみに美術館界で言うと，創作室を設置して独立させた機関としてやってきたのは，宮城県美術館が先達です。全国的にも評価されてきました。

（吉川委員）
　広報は広報で別な仕事なので，教育普及の人が広報の仕事までやるのでは無く，美術館の中に広報部があると良いと思います。

（高山委員）
　それは今の現状では無理でしょう。

（吉川委員）
　学芸員や教育普及部員が広報も進めるのはよくなくて，広報は広報で専門として美術館にあり，教育普及の広報も企画展の広報もカフェの広報もしっかりと広報部が独立してあることで発信力が全然違うと思います。

（佐々木座長）

これは教育普及部門の問題では無く，美術館の運営の在り方として広報部門があると良いと言うことですね。

（吉川委員）
とてもプログラムが多くて，ひとつひとつ参加したら楽しいだろうということが推測できます。自分が子ども時代に楽しんできたからそう思えるのですが，今はなかなか創作活動の体験が少ない中で，美術館でやっているプログラムが魅力的だと想像できる力が欠けている人が多くなっています。それを見せ方としてすごく魅力的に出来る人が美術館に一人いることで，美術館がすごく面白いと思わせることが出来るのではないかと思います。
もう一つ質問ですが，講堂とアートホールの老朽化とは具体的にどういうことでしょうか。

（西塚部長）
講堂は使用頻度が少なくなっています。今使うのが難しいところがあります。正直少し暗く，階段状になっていることもありますので。人数が少なければアートホールの方が使いやすいので，あまり使用度が高くありません。

（高山委員）
構造的におかしいという所はないのですか。つぶれてしまうような危険があると言うことではないのですか

（西塚部長）
そういうことではありません。

（吉川委員）
私としては，使わなくてもったいないし，良い雰囲気がある場所ので，もっと使った方が良いと思います。何か問題があるから使えないのかと思いまして聞いてみました。

（西塚部長）
収容人数の問題もありますが，アートホールの方が新しいので使うということもあります。

（高山委員）
いわゆる講堂（学校にあったような）なので，オープンスペースとしては使えない。美術館としていろいろ応用がきくようなスペースとして使うような施設ではありません。

（吉川委員）
もう一つ，機材（プロジェクター等）の老朽化は，リニューアルの問題とは別に，毎年の予算で少しづつでもまかなえないのですか。

（西塚部長）
毎年予算要求はしていますが，なかなか難しいところがあります。

（吉川委員）
美術館のものが最高の画質で観られないというのは残念ですね。画質の悪いものを誰も観たいとは思いませんよね。

（佐々木座長）
いわき市美術館でも，ハイビジョンが老朽化し，一部故障したので修理を検討したところ，購入するのと同じくらい修理費がかかることが分かりました。それが１０００万円ぐらいかかるということで，１０年先のことを考えたら，なかなか修理をするということにはなりませんでした。
少なくとも，ハイビジョンが今は使えない状況ということは理解されましたので，この後どういう方法で映像を通した教育普及ができるのかという点については御提言していただければと思います。

（吉川委員）
ぜひ毎年少しづつ直して欲しいですね。

（泉委員）
ここ（資料３）にあるいろんなプログラムはハイビジョン用に作られたものですか。最近の媒体（４Ｋ）で映すことはできないのですか。

（西塚委員）
あくまでも立派なハイビジョン用です。

（泉委員）
他の機材では使えませんか。

（西塚部長）
無理です。

（佐々木座長）
他に何か質問はありませんか。

（小野田委員）
アウトリーチのことですが，宮城県美術館は，アウトリーチの発祥の地ですよね。そこでいろんな人が影響を受けて，学校や教育委員会を巻き込んで大きなイベントをやってきました。

これまでいろんな人が育っている美術館ですが，その本家が最近元気が無いように見えます。斎さん以降，ちゃんと引き継がれてパフォーマンスを出しているかというと何とも言えない部分があります。（正直外野からなので好きなように話していますが，）

それはなぜか，どこかでエネルギーを使って，次の世代のアウトリーチの担い手や新しい技法を考えていく人を育てなくていいのか。美術館としてその必要性はないと判断しているのか，知事の理解が無いから仕方が無いということなのか。

（高山委員）

元気が無いと言うことはみんな分かっているが，お金の問題だけではないと思います。それは何なのか，企画力が無いのか，どうなのか。

（西塚部長）

今新しいものや子ども向けのものなど検討している最中です。

（小野田委員）

いろんな美術館で，ここで生まれたものが，次の世代に引き継がれています。ここでそれをもう一回取り戻して，さらに良いものに積み上げていくこと。レジェンドをみんなが覚えている間に，美術館を好きな人やちょっと関わった人はみんな知っているわけです。レジェンドがいるうちに，ちゃんとアウトリーチをしっかりできるといいなあと思います。

（高山委員）

今回の課題には，設備やハード面が出てきているが，企画や内容の事業評価がないのはどういうことかなと思う。

（小野田委員）

アウトリーチをやっている人達みんなが，そのことをここで学んだと思います。

（西塚部長）

その辺のことを再吟味していきたいと思います。

（高山委員）

斎さんも年だし，一緒にやってきた人も少なくなってきて，そのころのパワーのある人がいなくなってきています。次を継ぐ人たちが形にしていかないと，ただ形骸化してしまう。昔はみんな宮城が頑張っている，宮城県美術館の創作室がすごいということを聞いて，外から人が集まってきて勉強して戻っていったわけですが，今外から来る人はいるのですか。

（西塚部長）

全然いないわけでは無いですが，少なくなっていると思います。

（小野田委員）
　県の仕事もしているので，県の財政状況が厳しいのは分かります。その上で，文化事業をやることは大変だと思いますが，これまでしっかりとやれているかどうかの事後評価をしっかりとやって，自分たちの存在を上にかなり力ずくで認めさせて来た部分があります。アウトリーチについても理解のある人にとってはとても大切なものと分かってもらえますが，そうでないと，何を遊んでいるのとまわりから認められないところもあります。でも，それらを位置づけるために一生懸命頑張ってきたところがあります。ただ，個人の取組ですごいところにいってしまったので，それを組織的に再構築するのは難しいことだとは思います。

（西塚部長）
　創作室全体をリニューアルするとともにソフト面の再構築も考えていきたい。

（佐々木座長）
　再構築していくためには，先ほど来委員の方から意見がでていますが，自己評価していくことが大切ということですね。

（吉川委員）
　宮城県美術館の教育普及がすごいと言われてきたころの人たちは，利用者の方々に何か見せられるとか教えられるということでは無く，何かの体験を通して自分で何かを発見する視点を与えられていたことが，すばらしい教育普及プログラムだった。
　この一連のプログラムをみると，どこの美術館でもよくやっている，何か専門的なこと学術的なことを教えてもらえるという内容になっています。それはそれで大切なことで，興味のある人には，とてもおもしろいことですが，何も予備知識がない人たちにはなかなか入りづらいものがあります。全部が全部そういうものとは思いませんが，学校の先生も今，美術の見方や人生に資するものとしての捉え方ができていない中で，子どもや先生が来たときに，何かを発見できるとか，自ら発見できるインタビュケーションが必要だと思います。新しい発見ができるように。そういうプログラムがどんどん少なくなって，何か体験させてあげる，技法を教えてあげるというどこの美術館でもあることになっていると思います。
　今私が関わっている複合施設や，文化施設などのコミュニティプログラムでも，もっと自ら体験して自ら発見できる喜びがあるものに進もうとしている中で，その視点が全体的に足りない。リニューアルからではなくて，今ある収蔵品でも，ある視点を与えると３時間くらい楽しめることがあるかもしれません。そういうことがあれば，また宮城県美術館が面白くなったねと評価されるし，面白いものに対しては人は嘘をつかないので，新しい発見ができる場所に人は集まると思います。どんなに立派な施設で新しくなっても，内容が変わらないと人は集まらないと思います。だから，プログラムを作る方向性に違うものがあっても良いのではないかと思います。

（西塚部長）
　これまでも取り組んできた美術館探検や美術探検等の視点を大切にして，そういう点も踏まえたプログラム開発を進めていきたいと思います。

（高山委員）
　創作室前の野外スペース（中庭・ギャラリー）は昔いろいろなことをやっていましたが，今は空きスペースになっています。何もやっていないのでデッドスペースになっているように思います。

（美術館：松崎）
　コンクリートのはがれがかなり進んでいて，直すことができていないので使えません。

（吉川）
　芝生にしたら良いのではないか。

（有川館長）
　開館当初，確かに評価をいただき，活動が他に類を見ないことでした。当時の担当職員が中核的な役割を果たしていたわけですが，それがすべて良かったとか，当時のものがどこにいったかという議論になっています。開館当時のレガシーがどこにいった，なぜなくなったか，ということは，外的要素や予算の問題もありますし，それが可能だった時代の風潮やそういうことにたくさん人が集まってくるコミュニティの存在等いろいろなことがあると思います。
　またそれを遺産として今日に残せていないのは，その活動が持っていた内部的な限界があったのかもしれないなどの視点もありますし，当時評価されていたけれどもなぜ残せなかったのかということについては，外的な要因だけでは無く，そのプログラムがなぜそのとき盛り上がっていたのか，今何を残し得たかということを，我々は自問自答しなくてはいけないと思います。
　現在そのことについて，学芸員は非常に努力しています。今年度も新規事業として「土曜キッズ」を始めました。これはおしきせのプログラムをただ進めるのでは無く，なんとか自己発見できるものにしたい、それは開館当初の職員がやってきたことも学びながら，話を聞きながら，受け継ぎつつやっているので，もう少し見守ってもらいたい。

（佐々木座長）
　ありがとうございました。一つ質問ですが、オープンアトリエは同時にどれくらい人が入ることができるのか。また，一度にいくつぐらい異なる技法の活動ができるのですか。

（西塚部長・松崎学芸員）
　「いつでもだれでも自由に」というスタンスで進めているので，一概に何人までということは難しいですが，オープンアトリエは創作室１と２室に分かれています。（平面創作の部屋と

木工金属の部屋）どちらの部屋も人数で計るのは難しいですが，例えば，平面創作の部屋では，版画などは同時に３～４種類はできます。でも各部屋１０人くらいが動きやすい限界です。

（佐々木座長）
各部屋１０人以内くらいということですね。平面と立体があるときにお互いに邪魔にならない人数ですね。このオープンアトリエでは，同じ部屋で様々なワークショップをやっていますが，準備や片付けの時は，オープンアトリエの半分くらいは塞がってしまうということになるのでしょうか。

（松崎学芸員）
場合によりますが，閉鎖ということでは無く，実質的にワークショップが占有してしまう時間が出てきます。

（佐々木座長）
それから，準備室のようなものは十分にありますか。

（西塚部長）
普通のものよりは十分大きいと思います。ただ物が入っていれば狭くはなりますが。

（佐々木座長）
アウトリーチ的な活動を考えると，独自のいろいろなキットなどが必要になり，新しいことが増えるとキットも増えていくと思います。それでも当面対応できますか，それとも足りないでしょうか。

（松崎学芸員）
今置ける範囲でやっている現状なので，埋まっていくのは事実ですね。今以上に何かを増やす余裕は難しいです。

（佐々木座長）
新たなキットを開発したりとか，創作室１・２に関わらない新たな技法（事業）展開した場合，創作室３・４とかあるいは自由に使える空間などの必要性はどうでしょうか。

（松崎学芸員）
基本的には，今までも子どもたちが参加したり，学校単位で来た場合，大人と同居して活動することになっています。今年度から始めたキッズプログラムでも，１００名以上来る場合があります。その場合、大人の製作を一時中断して我慢してもらっているので，子ども用のスペースの必要性については，話として出たことはあります。今の造形遊戯室では活動に幅がでませんので，子ども用をという話はあります。

（高山委員）
今の場所でまかなうか。チルドレンルームみたいなものを考えるのか。併設するのか。
先程のデッドスペースがあるのはよくないと思います。美術館に来たときに生きていないので暗い雰囲気になってしまう。活き活きする美術館を作るときに，暗い場所があるのはよくないと思います。直すのも良いですが，そこに作品などがあったり，人が動いていて，はじめて活き活きとしたものになるので，はやり云々の問題では無く，考え直す必要があると思います。

（佐々木座長）
それでは，質問ではなく意見が増えてきたので，御意見をお願いします。

（高山委員）
創作室の画像データが結構たくさんあるはずですが，当初からの記録が見えるようになっていないのではないかと思います。それらはどこにあるのか，保存してあるのか。
昔のビデオだと劣化している可能性もありますが。

（西塚部長）
非常勤職員がＤＶＤに焼き直しをしています。

（高山委員）
それは美術館にある機材でやっているのですか，それとも外注ですか。

（西塚部長）
美術館のものを使用しています。ただスピードが異なるので，さらさらと流れるようになりますが，一生懸命やっています。

（吉川委員）
圧縮されてしまうので，もったいないですよね。

（高山委員）
残すことも美術館の仕事なので，きちんと保存していかなくてはいけないと思います。

（西塚部長）
スピード調整できるものもあると思いますが，今は美術館にあるものでやっています。

（佐々木座長）
他に御意見はございませんか。

（高山委員）
ここで，いろいろなワークショップをするなり，それぞれ工夫していると思いますが，以前の方が実験的だったり，元気が良かったり，お金があったからか外部から人を呼んだりして，生き生きとして元気があったように思います。

（小野田委員）
館長がおっしゃっていましたが，時代が変わって，他にもいろいろな施設等もでき，イベントもたくさんあって，選択ができる様になりました。それがどうなのかということがありますが，何もその時代に戻れと言うことではありません。
よく東京などの美術館で版画の指導をしている学芸員と話をする機会があると，しっかりとこども達に美術を残す，根付かせることは大変だという話になります。でも，その企画をやれているのは，もとは宮城県美術館で始まったことで，そこで学んだことを今我々がやれているからいいんだという話になります。宮城県美術館がやってきたことが，停滞しているわけでは無く，次の学芸員たちが盗んで学習して発展させています。今も競争をしながら発展させている若い学芸員たちがいます。例えば、美術館のインスタレーションで町屋を改修して，まちづくりと美術館の関係を構築している人もいます。町屋に人が集まれるように工夫し，すごく挑戦的だと思います。
予算をあまり与えられていないからそうなのかもしれませんが。あの中庭には，昔作品が置いてあったりして，それを見たときに，なんだか分からなかったけれども，自分が全然理解できないすごいものが存在していると感じました。宮城県美術館はそういう場所であって欲しいし，「おどろき」を違う形でもう一度取り戻す方法をみんなで考えていけばいいと思います。
現在風にいうとそうなるのであって，昔が良かったと言っているわけではありません。

（高山委員）
例えば，美術館探検などは，美術館の内部にある作品を観るだけでは無く，美術館の構造や植木や動物の逃げ道など美術館の環境を観たり，その社会的な存在を観ることもできます。また，すぐに川向こうにも行けるし，そういうところで活動することもできます。創作室の在り方について，今の位置にあることによって，美術館から下に降りていけるような形も良いのではないかと思います。そうするとスペースとして全然違う意味を持ってきます。下から見上げる美術館ということもできるし。
違う視点でスケールを変えていかないと，仮に今の形を少し変えたとしても，箱の中だけでやるという発想は変えていかなくてはいけないと思います。

（吉川委員）
八戸の美術館に来るアーチストたちと，そこを市民にとってどういう場所にするかを考えていくときに，ものを作る場所（創作室）の存在は大きいものがあると感じています。
基本的にものをつくる喜びをみんなは知っているので，ものを作る場所があることが魅力的になります。今，学校などにもそういう場所が無くなってきているから，大人のクラブ活動の

場的なものでもいいので，ものを作る場所が必要だと思います。アーチストもそう意識していることで私たちも考えるようになりました。

創作活動を支えることは創作室の一つの役割であるわけですが，あえてこちら側が準備して与えるという発想では無く，どんどん市民から持ち込まれた創作意欲をどうしていけばよいか考えて，支える場でもあると思います。今のニーズはそういうところにあります。みんなが町を変えていきたい，もっと居住環境を良くしたい，自分も何かアート的なことをやってみたいというニーズは，実は美術教育が無くなってもおとろえることなく，人にはあるわけです。だからイケアに行ったりするわけですが，もっとオリジナルを求める人たちも多いです。そういう半開かれた場所があればいいなと思ったときに，今，宮城県美術館には，その開かれた状況がないし，空間的にも閉ざされてるし，運営的にもそういう点が足りないと思います。

特に仙台も含め宮城県全体が民間のプロフェッショナルの人がいない場所で，もっとそれを吸引しないといけない。もっと企業のサポートももらえる可能性があるわけなので，そのためにも，市民がそこで活発な創作活動している，クリエイティブなことをやっている美術館であるほうがよいと思います。

例えば、東北大の学生はただで入れるので，何か作らないまでも，一つの作品を観ながら哲学ができるとか，別に美術館が企画しなくても，持ち込まれた企画に何か寛容に対応できるサポートができれば良いと思います。そういう可能性をみんなが感じるともっとみんなが使うようになると思います。たぶんそのエネルギーを受け止めきれていないというか，ボールが投げられてもいない状況というか，あそこに投げても受け止めてもらえないというあきらめもあって，投げたいとも思われていないのではないかと思います。

（高山委員）

創作室祭りのようなことをやってみてはどうか。ワークショップ屋台をたくさん出す。広場から裏の池の前やアリスの庭にかけてでもいいので，いろんなところに変わったワークショップ屋台を出して一週間ぐらいやってみる。大変かもしれませんが，来れば遊べるぞとなれば，一般の人の意識も全然変わってきて，何か始めたぞと思うし，新聞なども書いてくれると思います。今だと書きようがないのではないでしょうか。

（小野田委員）

今はすごくお行儀が良すぎます。東北大の学生もそうですが，非難されないように完全に防衛（トレーニング）しています。その状態でもクリエイティブなことができると思っています。私から見ればできるはずがないが，できると信じています。そういう殻を誰が作ったか。子どもたちを誰がそうしたのか，とても不思議です。

アートもそうなっている気がします。アートには何をやっても自由だという発想が必要です。町の中でやるとおかしく見えますが，ここ（美術館）ならできます。何をやってもいいんだという非武装地帯としての価値をもつ美術館という見方も必要です。

（吉川委員）

もともとアートとしての教育普及はそういうものだと思います。そのことで人生も豊かになるし，もっとイノベイティブなことも生まれてくる。

（高山委員）
昔，ワークショップをしていたときに，子どもからおじいさん，おばあさんまで来るのですが，階段を杖をつきながら来たおじいさんに，「危ないから気をつけてください」と声をかけた時に，「アーチストが何か変なことをやっているので見に来たんだから」というようなことを言うわけです。子どもは子どもで，観て帰った後で，学校から電話が来て，美術館の職員を学校に呼んできて，学校で作品をつくらせろと子どもが言っているということでした。
何だか日本はどこかきれいごとで，おとなしくなってしまっている。何かＨＯＷ　ＴＯ化してしまった所は困る。そういうところを創作室が壊していかないといけないと思います。
また，展示は展示である意味神聖なものとして考えるとともに，アクティブなものが混在しないといけないと思う。そうしないと社会なり市民なり県民から評価されないし，ここに何のためにお金を使っているのかということになってしまう。

（佐々木座長）
これまでの御意見は，活動は柔軟であるべきだが，機能や施設が固定化されていて，柔軟であるべき活動がだいぶ妨げられているという点が一つありました。気になることとしては，先ほど来より話に出ている先達としてワークショップを進めてきた人の活動をあまりに神聖化（神話化）してしまうという点です。あまりに犯していけない聖域にしてしまうと，そのことに美術館で働く人たちが縛られてしまい，さらに固定化してしまいます。その中で何ができるかと考えたときに，組織施設の固定化と同じように考え方を縛ってしまう要因になるのでは無いかということを感じます。
やってきたことを正しく評価して，何を受け継いで，何を改善していくのかを検討して欲しいと思います。

（吉川委員）
確認ですが，私は，斎さん達がすばらしいと言ったのでは無くて，何かを発見できるプログラム活動を進めて欲しいと話したわけで，彼のやり方だけをすばらしいと言ったわけではないので，誤解の無いようにして欲しいです。

（佐々木座長）
そうですね，誤解をしているわけではありません。

（小野田委員）
吉川さん達が言ったのは，まだ斎さんがいるので，内部の問題として，ついつい遠慮してしまっているということで，外部の良いところは斎さんから学んだことを生かしていろんな取組をしているので，ここ本家も，レジェンドも使って，今の時代に求められていることをやって

いいのでないかとみんな思っているので，やってもらって，乗り越えてもらうことが必要だということです。その方が斎さんもうれしいはず。レジェンドがいるので，いろんな企画をやるときに人が集まってきます。なにかやれば，宮城県美術館の教育普及がまた復活するんだってと，そこで教えを受け人たちが受け止めるので，一から始める必要はなくなるということだと思います。

（高山委員）
そういう実験的なことを考えて勇気を持ってやるということをしないといけないと思います。

（佐々木座長）
　今回、様々な活動を考えていくときに，課題のほとんどが老朽化になっています。老朽化が課題になるのは当たり前なので，どこでも３０年もたてば老朽化するのは当然です。
　もっと根本的なところで何が課題になっているのかを考えていただいて，その中ではじめて最後にあがってくる教育普及活動の再構築という言葉につながると思います。この懇話会もそういう意味も含めた会議なので，御協力できるところはいかようにも御協力したいと思います。どうか課題をもう一度抽出し直してもらいたいです。

（高山委員）
　現在創作室の作りが，平面と立体の二つに分かれていますが，今アート（美術）の枠組み以外の新しいものがたくさん出てきて，例えばロボットを作りたい，ちょっと電気的なものなど，ものづくりなどの境目が無くなってきている中で，設備投資をしないといけないし，子どもたちの興味とかみ合わせること，そういういわゆる教材研究というようなことも教育普及の仕事だと思います。

（佐々木座長）
　子どもの教育を考えていくときに，「チルドレンミュージアム」的な機能を持たせるのか，小さくても「チルドレンミュージアム」を併設するのか。これは是非議事録の中にも残しておきたいことです。
　他に何か御意見はございますか。無ければこれで今日の議事を終了いたします。
本日はありがとうございました。

（事務局：上原）
　議事大変お疲れ様でした。続いて連絡に入ります。では事務局から。

（事務局：小野寺）
　まずお手元の第２回懇話会の議事録について，文言の修正箇所がありましたら事務局までお願いいたします。

次回の開催について連絡いたします。次回は１１月２７日（金）を予定しております。改めて案内はいたしますが，宜しくお願いいたします。

（事務局：上原）

以上をもちまして，第３回宮城県美術館リニューアル基本構想策定に係る懇話会を閉会いたします。本日は，ありがとうございました。